まなびや

特別展

令和７年　令和８年
１２月２３日～３月２２日

『たいへんよくできました』

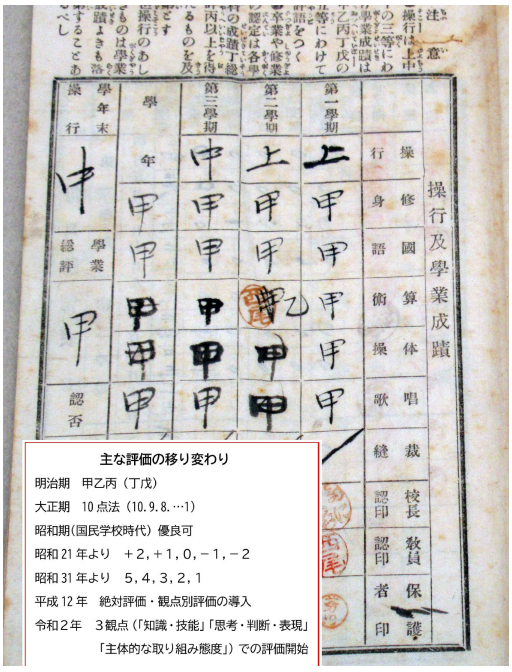
～賞状と通知表からわかること～

賞状や通知表を見ると、学校や社会が子どもたちに何を期待していたのかが見えてきます。明治時代から現代までの資料を通して、子どもたちの学校生活と社会の移り変わりを学業・健康・行事・所見など、テーマごとに紹介します。

点数から、成長を支える記録に

明治期の通知表は「甲・乙・丙」で序列を示し、学力を厳しく評価していました。やがて「優・良・可」や数字による10段階評価が登場し、昭和初期には5段階評価が全国に広がります。戦後は民主教育の理念のもと、単なる点数から「A・B・C」や観点別評価へと移行し、学習態度や思考力も重視されるようになりました。平成以降、小学校では「◎・○・△」「よくできた・できた・がんばろう」など、より柔らかな表現が増え、子どもの努力を伝える工夫が進んでいます。

明治期の通知表（成績は甲乙丙丁戊の５段階）
1905（明治38）年　福井市　豊尋常小学校



主な評価の移り変わり

明治期　甲乙丙（丁戊）
大正期　10点法（10.9.8.…1）
昭和期（国民学校時代）優良可
昭和21年より　＋2，＋1，0，－1，－2
昭和31年より　5，4，3，2，1
平成12年　絶対評価・観点別評価の導入
令和2年　3観点（「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的な取り組み態度」）での評価開始

現在の評価方法と成績の見方

▼通知表の目的

通知表は、子どもの学習状況や学校生活の様子を保護者や本人に知らせ、長所や改善点を確認するものです。学校と家庭が連携し、子どもの教育に役立てることを目的としています。

主に「観点別評価」と「評定（教科の総合評価）」、そして「所見」の３つの要素から構成されています。これらの情報を総合的に見て、子どもの成長を促すことが大切です。

▼通知表の主な評価項目

１　観点別評価

【内容】各教科における「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３つの観点で評価されます。

【評価方法】小学校ではＡ（よくできる）・Ｂ（できる）・Ｃ（がんばろう）の３段階で評価されることが一般的です。中学校では、これらの観点別評価を基に、後述の５段階評価が算出されます。

【評価基準】二〇二〇年度から評価項目が変更され、絶対評価が用いられています。これは、他の生徒と比較する相対評価とは異なり、設定された学習目標に対してどの程度達成できたかを評価するものです。

２　評定（教科の総合評価）

【内容】各教科の学習状況を総合的に評価したものです。

【評価方法】中学校では１～５の５段階で評価され、数字が大きいほど評価が高いことを示します。小学校では、１～３の３段階で評価されることがあります（１・２年生を除く）。

３　所見

【内容】担任の先生が、子どもの学習面や学校生活での様子、態度、成長、今後の課題などを具体的に記述する欄です。

【重要性】数字や記号だけでは伝えきれない子どもの個性や努力、成長が記されており、保護者が家庭でのサポートを考える上で重要な情報源となります。先生が特に伝えたいことが凝縮されている部分であり、子どもの良い点や成長した点が書かれていることが多いです。

▼通知表を見る際のポイント

【総合的に見る】数字や記号だけでなく、観点別評価や所見の内容も合わせて確認しましょう。

【成長を褒める】子どもが頑張った点や成長した点を具体的に褒めることで、モチベーション向上につながります。

【前学期と比較】評価が下がっていないか、前学期と比較して子どもの変化に注目しましょう。

【担任との連携】疑問点や気になることがあれば、個人面談などで担任の先生に相談し、子どもの学校での様子を確認しましょう。